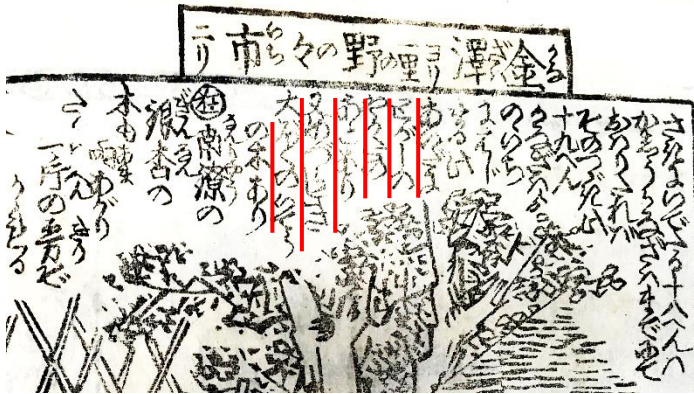


野々市の名所

江戸時代は庶民に向けた旅の案内本や地図が多く出版されました。そして、実際に訪れることができる観光スポットとして「名所」が紹介されるようになりました。当時の観光案内本から、野々市の名所を探ります。



『金の草鞋』第十九編 白山参詣 文久10年(1813)

「富樫の館の跡あり、また珍しき大木の銀杏(いちょう)の木あり」

この本によると、野々市には富樫館跡と大銀杏とがしがあるおおいちょうと書かれています。当時はこの2箇所が野々市の名所であったことがわかっています。

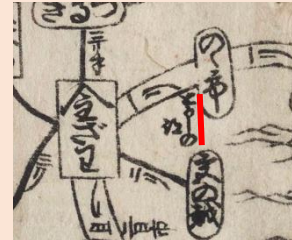
富樫館跡 (市指定史跡)

中世に加賀を治めた富樫氏は守護所を野々市(現在の住吉町付近)に構えました。館の大きさは、約120m四方と考えられます。館の跡地は、敷地を囲む土塁どるいが残っていたとされ、江戸時代以降は名所として旅人に知られていたようです。



〈発掘された堀の跡〉
平成6年(1994)の発掘調査で堀の跡が見つかり、その場所は現在、市指定文化財の史跡として保存されています。

「道中独案内図」文政5年(1822)



「のゝ市」のそばに「とかしの跡」(富樫の跡)とあります。

大公孫樹 (おおいちょう) (市指定天然記念物)

本町の布市神社の境内にあり、高さ約20m、幹回り約5mで、樹齢は推定で約500年とされます。戦国時代にこの地に館を構えた木村孝信の墓標との言い伝えがあります。江戸時代の資料には、大きなイチョウの木として野々市のランドマークとなっていたことがわかります。

